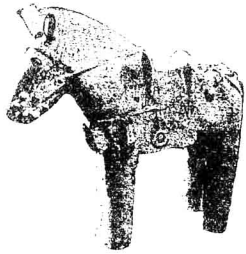
折口学と古代学

慶応義塾大学
国文学研究会 編

折口学と古代学



慶応義塾大学
国文学研究会 編

折口学と古代学　　検印省略

平成元年11月10日　印刷
平成元年11月15日　発行

編　者©慶応義塾大学国文学研究会
発行者　坂　倉　良　一
印刷所　シナノ印刷㈱
製本所　㈲松栄堂製本

発行所　㈱　桜　楓　社　　101 東京都千代田区猿楽町1－3－1
電話 03-295-8771〈営業〉
03-295-8774〈編集〉
振替 東京6－18020

造本には充分に注意しておりますが、落丁本・乱丁本などがございましたら、発行所かお求めになった書店でおとりかえいたします。

Printed in Japan　ISBN4-273-02343-1　C1091

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

折口学と古代学　目次

「口ぶえ」から「死者の書」へ　岡谷　公二　7
柳田学と折口学　梶木　剛　35
天津神と国津神
——〝インドネシア型〟と〝オセアニア型〟とを比較対照して——　馬淵　東一　67
中世の罪と罰　笠松　宏至　89
昼か夜か
——『萬葉集』巻二、一三三の歌など——　佐竹　昭広　111
「まれびと」論と海洋宗教　五来　重　135

源氏物語私見　秋山　虔　171
民俗思想における日和見（ひよりみ）　宮田　登　199
異郷の生　加藤　守雄　223
鼎談　折口学と古代学　岡野　弘彦　三隅　治雄　西村　亨　253
あとがき　291

折口学と古代学

本書は、慶応義塾大学国文学研究会主催による二種の講演会、すなわち、折口信夫没後三十年を記念して昭和五十八年十月十一日から十五日にかけて行われた第十一回講座「古代学」、ならびに折口信夫生誕百年を記念し、昭和六十二年十月三十日に行われた講演会「近代思想史における折口信夫」の講演内容を収録した。それぞれ講演速記をもとに、各講師の補筆を得て成ったものである。

「口ぶえ」から「死者の書」へ＊岡谷公二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

おかや・こうじ　昭和四年、東京生まれ。
東大卒、跡見学園女子大学教授。『柳田国男の青春』
『貴族院書記官長柳田国男』『島の精神誌』

柳田から折口へ

私は最初柳田国男に関心を持ち、柳田国男に導かれて、折口学に近づいた者です。もう大分以前のことになりますが、柳田国男の新体詩人時代に着目して、少し調べてみたことがありました。ご承知の通り、柳田国男は二十代の前半、かなり名のきこえた新体詩人だったのでありまして、独歩や花袋と一緒に『抒情詩』という、明治文学史の古典として残っている詩集を出しております。その新体詩は当時多くの人々に愛唱されたので、時には藤村以上と言われたことさえあるのであります。しかし晩年の柳田国男は、自分の新体詩をはっきり否定し、全集には入れさせませんでした。「思うてないことばかり言うておる」「お座なり文学」だから、というのがその理由であります。

しかし、実際に読んでみますと、これがなかなか面白い。勿論大部分は、今では読むに堪えない甘い恋の詩ですけれども、その中のいくつかの作品には、彼の感受性の結晶が見られます。そして人間の感受性の質というものが一生にわたってそれほど変化しないと致しますならば、柳田国男の処女作は『後狩詞記』でも『石神問答』でも『遠野物語』でもなく、『抒情詩』の中に収められているその詩集「野辺のゆきき」でなければならないのであります。

たとえば晩年の著作『海上の道』の中で、柳田国男は、日本人の渡来のほかに、常世、根の国、ニライカナイといった日本人の他界観を問題にしておりますが、「野辺のゆきき」を読んでみますと、このような他界の研究が単なる学問上の関心から出たものではなく、新体詩人松岡国男が抱いていた厭世観や他界願望とどこかでつながっているのが分かってまいります。

柳田国男は、民俗学者としてまず最初に漂泊民に関心を持ちました。漂泊民は、明治から大正にかけての彼の仕事の大きなテーマだった、と言うことができます。そしてこの関心は、彼の感受性に深く根ざしたものでもありました。しかし昭和に入って、民俗学を公式の学問として確立する段になって、このような関心は、切り捨てられてしまいます。常民を中心に据えなければ、民俗学がオーソドックスな学問として成り立たないからであります。昭和期の柳田国男の仕事にはたしかにすぐれたものが多いけれども、マージナルな部分を切り捨ててしまったために、私から見ますと、やや単調で、スタティックになってしまっている。「世のため人のため」というのが柳田国男の口癖でしたが、明治人らしいこのような考え方が、柳田学の骨組となっている一方で、その資質にもっとも即した関心を切り捨てさせてしまう、という結果をも生んでおります。ここに、ちょっと大げさな言い方を致しますと、柳田国男の悲劇がある、と私などは考えるのであります。

そこへゆきますと、折口信夫は、自分の関心に実に忠実に生きた人でした。折口信夫には、柳田国男が切り捨ててしまった漂泊民というテーマをそのまま受けついだところがある。柳田の折口に対する複雑な、屈折した気持は、その辺からも出ているのではないでしょうか？

「口ぶえ」の位置

大分前置きが長くなりましたが、本日の私の話のテーマは「『口ぶえ』から『死者の書』へ」であります。「野辺のゆきき」を出発点に据えて柳田学を透視したのと同じ方法で、小説「口ぶえ」を最初に置いて、折口学を考えてみたい。とくにもう一つの小説「死者の書」との関係を考えてみたい、と思うのであります。

私は、折口信夫が大正三年、二十七歳の時に発表したこの小説が、以前から非常に気になっておりました。折口の小説というと、すぐ「死者の書」というふうに言われる。「死者の書」はたしかにすぐれた作品で、いろんな方が「死者の書」について論じているけれども、「口ぶえ」を真っ当に論じた方というのはほとんどいない。自伝的要素を含んでいる小説なので、折口の伝記には必ずといっていいくらい引用されますが、文学作品として正面切って論じられることが少ない。それじゃあつまらない作品かというと、全然そうじゃない。今から読んでも十分鑑賞に堪える、むしろすぐれた作品だと私などは考えます。ただ前篇ということで中断しておりますし、若干構成に難があること、それから同性愛が主題になっていることもいくらか原因になっているかもしれないけれども、そういうことで「死者の書」の日蔭になって、長いこと日があたらなかった、という感じがいたします。

折口信夫は、後年「口ぶえ」についてほとんど何も語っておらず、あまり重きを置いていたとは思われない。たとえば、昭和十三年刊の『短歌文学全集　釈迢空篇』についている自撰年譜でも、この作品

にはふれていません。またこの小説は、発表当時から世間の注目を全くといっていいくらいひきませんでした。このような、生みの親からも無視された「口ぶえ」を私はあえて折口信夫のすべての仕事の出発点に据えようと思います。

折口信夫には、明治四十三年、国学院大学を卒業したときに書いた「言語情調論」という卒業論文があって、全集にも入っております。最近は、新しい言語学の立場からこの論文に関心を持つ方がぼつぼつ現われておりますけれど、これは発表を予期しない卒業論文なので、脇においておきますと、その次にくるのが、まとまったものとしてはこの「口ぶえ」なんです。「口ぶえ」発表の前年、大正二年に、彼は柳田国男の雑誌「郷土研究」に「三郷巷談」という文章を発表していますが、これは民俗の報告みたいなもので、本格的な論文として一番最初のものは、大正四年にやはり「郷土研究」に出た「髯籠の話」であります。

私が「口ぶえ」を折口信夫のすべての著作の処女作とするのは、そこに、柳田国男の「野辺のゆきき」の場合と同様、感受性の原形質と呼ぶべきものがはっきりとあらわれているからなのであります。

すでに東郷克美氏が「口ぶえ」について次のように書いておられます。

この作品には、鋭敏すぎる自意識、自己愛的傾向と、同性愛へのあらがいがたい傾斜、欲情に対する強い禁忌と自己否定、父祖の地大和への憧憬と死への誘惑など、折口的感受性の原液がすべて出揃っているといってもよい。（『折口信夫』有斐閣）

いや、それだけではない。ここには、後年の彼の学問の方向とその方法の萌芽さえ、あらわれていると言ってよいのであります。

まず最初に、この小説が書かれた時期、大正二年から三年――発表は三年ですけれども、実際に書かれたのは前年の九月頃と推定されますが、この時期の折口信夫の生活をちょっと見ておきますと、彼は明治四十三年に国学院大学を卒業しまして、すぐ大阪に帰ってきて、大阪府立今宮中学の嘱託教員になっております。彼は生徒たちを大変愛し、授業に情熱を傾けるんですけれども、中学の教師を天職とは考えていない。むしろ中学の教師であることを呪いさえし始めていますし、また大阪に一生根を下そうなどとも思っていない。

大正二年というのは、柳田国男が「郷土研究」を創刊した年です。折口は前から、「人類学雑誌」とか「考古学雑誌」といった雑誌に柳田が書いた論文を愛読していて、大抵漂泊民に関する研究なんですけれども、なんて不思議な学問があるものだ、と思い、わが行くべき道を見出した、と考えています。しかし民俗学なんていうものは、当時なきにひとしいんで、そういう学問で生活を立てる、ということは考えられない。柳田自身が貴族院書記官長という二足の草鞋をはいていた時代なんです。で、折口信夫は、卒業論文からみてもわかりますように、最初、言語学者になろうとしたというようなところが見えます。大正三年三月、彼は今宮中学をやめて上京しますが、その時「口ぶえ」が載った「不二新聞」という新聞の消息欄には、「釈迢空の名をもって知られてゐる折口君は、言語学研究のために上京せられるさうだ」と記されております。

一方彼はこの時期、短歌を含めて創作方面にもかなりの野心を持っていたようです。正確な執筆年代

はわからないけれども、ほぼ同時期に、説経節に材料をえた「身毒丸」という、短いけれどもすぐれた短篇小説を書いております。さらに上京してから「三田文学」に小説を投稿したり、歌舞伎の台本を書いていた時期があります。折口の古いお弟子の鈴木金太郎氏は、「『死者の書』が発表されて、世間では突如として先生が創作の筆をとられたように思っている人が多いであろうが、先生の脳裡には小説、戯曲への欲望が『口ぶえ』以来常にひそんでいたのである」と書いておられます。

ですからこの時期は、彼の中にさまざまな可能性がひしめきあっていた、いわば疾風怒濤の時代であった、と言えるかと思います。

折口信夫と新聞小説とは全く妙なとり合わせですが、この「口ぶえ」は、宮武外骨が大阪で発行した「不二新聞」という日刊紙に二十五回にわたって連載された、れっきとした新聞小説なんですね。外骨という人は皆さん御存知と思うけれども、度々の発行禁止にもまけないで、時の権力者を向こうにまわして、次々といろいろな雑誌や新聞を発行し続けた反骨のジャーナリストとして、最近とみに評価の高い人で、彼は大正二年四月にこの「不二新聞」を創刊しております。

例の南方熊楠がこの新聞の客員で、折口信夫とほぼ同時期に、実に沢山のエッセイを連載しています。南方という人は非常に面白い人で、色々な奇行があるわけですけれども、この奇行がたえずこの新聞のゴシップ欄を賑わせている。南方は同性愛に関心を持っていた人ですから、おそらくこの折口信夫の小説を読んだんじゃないかと思います。

で、この新聞の文芸欄をとりしきっていたのが、当時ちょっと名の知られていた作家で、今宮中学の同僚でもあった石丸梧平という人です。この石丸氏の推薦で、石丸氏の思い出によると、小説を書けと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.